

チェック!

ジニアの検査室で 繁殖障害の原因解明を



今回のテーマは 繁殖障害を 引き起こす豚の病気 についてです。

秋になり、人も豚も過ごしやすい季節となりました。暑かった夏に比べると豚も十分に餌を食べられるようになっていると思います。しかしこの時期、流産・早産・死産等が多発する場合があります。夏の暑さの影響と考えがちですが、病気によって引き起こされている可能性も否定できません。

●レプトスピラによる繁殖障害の危険性

流産・早産・死産を引き起こす病原体は日本脳炎ウイルス、バルボウイルス、PRRS ウイルス、豚丹毒菌など複数あげられます。

最近では、レプトスピラによる流産等の発生も家畜衛生保健所の業績発表等でたびたび報告されるようになってきました。

これは、人獣共通感染症の対象病原体であるため、限られた施設でしか取り扱いができなかったレプトスピラが遺伝子診断法（PCR法）の普及に伴い各検査機関で検査可能となってきたことと関連があります。

レプトスピラによる症状は再発性の増加、早産・死産や虚弱・未熟子豚の娩出が知られていますが、日本国内での浸潤状況がどのようになっているかはあまり知られていませんでした。

風見ら*が1996～97年にかけて関東地方で早産や死産が見られた44頭の豚についてレプトスピラ抗体の検査を実施した結果、コペンハーゲンやカニコラという血清型に対する高い抗体陽性の豚が確認され、関東地

方での浸潤が示唆されました。特定地域以外での報告も少ないため全国的な浸潤状況はわかりませんが、今後の動向に注意したい病気です。

●全農クリニックセンターの取り組み

全農クリニックセンター（ジニアの検査室）では流産・早産・死産が多発した場合、原因追求のため母豚由来の血液を用いて日本脳炎ウイルス、バルボウイルス、ゲタウイルス、オーエスキー病ウイルス、PRRS ウイルスや豚丹毒菌を対象とした抗体検査や、流産胎仔由来臓器を用いた各種PCR検査等を実施しています（表1）。ジニアの検査室でもレプトスピラPCR検査体制を整備し、野外事例への対応も開始しています。

妊娠後期に流産が多発した事例では原因究明のため、流産胎仔由来臓器を用いて各種検査を実施し、レプトスピラの関与が示唆されました。この検査結果をふまえ、農場において効果的な対策が検討できた事例もあります（表2）。

このようにジニアの検査室では衛生対策に必要な検査項目の新規検討も都度実施しています。

流産・早産・死産が多発した場合、病気の関与を第一に考えます。しかしながら対象となる病気は複数あることから、どのような病気に関与しているか効果的な検査をするためにも、かかりつけの獣医や全農の衛生担当にご相談の上、検査のご依頼をお願いいたします。

*風見ら J.Vet.Med.Sci.64(8):735-737,2002

表1：流産・早産・死産が発生した場合の検査（例）

検査材料	検査の種類	検査項目
血液	抗体検査	日本脳炎ウイルス、バルボウイルス、ゲタウイルス、オーエスキー病ウイルス、PRRSウイルス、豚丹毒菌
流産胎仔由来臓器	PCR検査	日本脳炎ウイルス、バルボウイルス、ゲタウイルス、オーエスキー病ウイルス、PRRSウイルス、豚丹毒菌、レプトスピラ

表2：全農クリニックセンターで実施した検査結果（例）

検査材料	検査項目	PCR検査結果
流産胎仔由来臓器 (種付後80日前後)	日本脳炎ウイルス	陰性
	バルボウイルス	陰性
	PRRSウイルス	陰性
	豚丹毒菌	陰性
	レプトスピラ	陽性